

# 「って」の機能について

## ～ある名詞句の属性を捉え直す用法に注目して～

安斉真生

### 1. はじめに

本稿では、話し言葉に現れる提題の助詞「って」（以下、「って」）を扱う。

「って」に関する先行研究は、藤村（1993）、丹羽（1994）、渡辺（1995）等があり、「って」の基本的性格は、藤村、丹羽によって明らかになっている。この二論文は、「って」に二つの用法を認めている。一つは、「って」の前にくる語が記号内容の分からない語であることを表す「メタ言語的用法」である。

- (1) ニンゲンって地球上の生物のこと？（丹羽(1994: 88)）

これが本来の用法とされる。そして、もう一つは、「って」の前にくる名詞句の記号内容を捉え直す用法である。

- (2) 人間って本当に高等動物なのかな？（同: 88）  
(3) うっ、納豆ってくさいなあ！（渡辺（1995: 114））  
(4) ディスコって家族で行くもんと違いますよ。【実例】

先行研究では、このような「ある名詞句の記号内容の捉え直し」が、どのような状況で必要になるか、が明らかにされていない。また、この3例はいずれも「って」を「は」に置き換えることが可能であるが、談話の状況によって「って」と「は」を使い分ける必要があると思われる。

次の例も「って」を「は」に置き換えることが可能である。しかし、狂言の家元に対して素人がこの文を発した、という状況だとしたら、「は」は出過ぎた印象を与え、丁寧さに欠く話し方になり、不自然である。

- (5) 狂言って体をすごい駆使するじゃないですか。【実例】

そこで本研究では、同じ提題を表す助詞「は」と比較しながら、捉え直す用法の「って」が、談話のどのような状況に現われ、どのような機能を果たすか、を明らかにする。また、「って」の、丁寧さとの関わりについても明らかにする。

## 2. 先行研究の問題点

1で触れたように、「って」には、二つの用法があることが藤村と丹羽によって指摘されている。一つは、メタ言語的用法である。これは、「って」の前に来る名詞句（以後、名詞句X）が、記号内容の分からない語であることを表す用法である（例文（1））。二つ目は、丹羽では「捉え直す用法」、藤村では「名前しか分からない言葉を表す用法」とされている用法である（例文（2）～（5））。本稿でも「って」にこの二つの用法を認めて議論を進める。

二つ目の用法については、丹羽の「捉え直す用法」という呼び方を用いる。その理由を、（1）（2）を比較しながら、述べる。

（1）は、先述の通りメタ言語的用法の例である。火星人がこの文を発する状況を想定してみる。「って」の前の名詞句「ニンゲン」は、話し手の火星人にとって記号内容の分からない語である。一方、（2）の話し手は、名詞句「人間」のことは知っているが、「って」を用いて「新たな観点（丹羽（1994：88））」からそれをもう一度捉え直そうとしている。というわけで、この用法を、本稿では「名詞句Xを捉え直す用法」、あるいは「捉え直す用法」と呼ぶ。

さて、この捉え直す用法について論じているのが、丹羽と渡辺であるが、この2つの先行研究には以下の問題点がある。

1で挙げたように、この捉え直す用法の用例を見ると、「って」を「は」で言い換えることが可能な例が見られる。「は」との違いについて、丹羽は次のように述べている。

「は」は（...）捉え直しを表すような述部に別に限らないが、「って」あるいは「とは」「というのは」は捉え直しを表す述語に限られる。（p.89）

しかし、「は」での言い換えが可能な例が存在する、ということは、述部が捉え直しを表しているのではない、と言わなければならない。

また、渡辺は、話し手の知識の中に様々な語彙項目について様々な属性が書き込まれていると仮定し、属性情報の出し入れに「は」、「って」、「」<sup>1</sup> が関わり、「は」と「って」については違いを次のように説明している。

「は」は記憶された情報をファイル（[+時空] [-時空] 両方のファイル）<sup>2</sup> から取り出す際に使用され、「って」はXに関する新たな属性を [-時空] ファイルに取り入れるときに使用される形式である（...）。（p.119、括弧内は筆者が付加）

（6）、（7）の「は」は、それぞれの語彙項目「雪」、「あの蜂」に関する属性情報「白い」（[-時空] ファイルに記憶されている属性）、「さっきからずっと花の周りを飛び回っている」（[+時空] ファイルに記憶されている属性）の取り出しに使用されている。一方（8）の「って」は、「雪」の属性情報「白い」の、[-時空] ファイルへの取り入れに使用されている、と言う。

- （6） 雪は白い。（渡辺（1995：108））
- （7） あの蜂はさっきからずっと花の周りを飛び回っている。（同：109）
- （8） （はじめて雪を目にした人が）  
雪って白いんだ。はじめて知った。【作例】

しかし、これでは、「は」「って」ともに許容される例の存在が説明できない。

具体的に（3）を例にとり見ていく。丹羽によれば述部「くさいなあ！」が捉え直しを表している、ということになってしまう。そうではなく、「って」を用いると、名詞句「納豆」を捉え直すことになり、「は」ではそうならない、と言わなければならない。また（3）が例えば、話し手がはじめて納豆を食べたという状況なら、話し手は「納豆」に関する「くさい」という属性を知識として取り入れている

<sup>1</sup> 「」は無助詞を表す。「わあ、今日の空、青いね。」（渡辺：105）のように、助詞を使わない形式。

<sup>2</sup> [+時空]ファイルとは、時間的空間的限定を受ける属性を記憶するファイル、[-時空]ファイルとは、時間的空間的限定を受けない属性を記憶するファイルのことである。例えば（3）の、納豆の「くさい」という属性は、時間的空間的限定を受けないファイルに記憶される。

安斉真生

るという解釈になり、渡辺の説明する通り、「は」でなく必ず「って」を用いるだろう。しかし、話し手がすでに納豆を食べたことがあるという状況では、「は」も「って」も許容され、これは渡辺では説明できない。

(2)から(5)の例を見るとやはり、「って」と「は」のニュアンスの違いはあり、話し手は何らかの理由で「って」を選択したり「は」を選択したりしていると思われる。つまり、「って」を用いての捉え直しは、談話の状況で必要になったり、あるいは話し手が捉え直す形をとった方がいいと判断したときになされたりする、と考えるのが妥当であると言える。

### 3. 名詞句Xの捉え直しが必要とされる状況と、そこでの「って」と「は」の違い

ここでは、捉え直しの「って」の機能を明らかにするために、どのような状況において捉え直しが必要とされるか、を述べる。次に、そのような状況における「って」と「は」の違いを提示する。そして、実例を見ながらそれを検証していく。

#### 3-1 捉え直しが必要とされる状況

まず、名詞句Xの捉え直しが必要とされる状況は、どのような状況なのかを考える。

本研究でも渡辺と同様、知識の中に、様々な語彙項目について、様々な属性が書き込まれていると仮定する。属性には、Xの属性として一般的によく知られているものから、Xについての個人的感想まで、様々な属性が含まれる。そして、名詞句Xの今まで知らなかったとある属性を発見したとき、それを知識の中に取り入れる操作を行うものとする。<sup>3</sup> 渡辺は、この取り入れの操作に「って」を用いているとしている。言い換えれば、ある属性の知識への取り入れのみが、捉え直しが必要とされる状況である、と言っているのだが、これでは不十分であることは2で見たとおりである。そこで、本研究では次のように考える。

「って」は、名詞句Xの、今まで知らなかったある属性を知識の中に取り入

<sup>3</sup> 具体例と操作の図は、3-3-1 参照。

れる操作を行うとき、忘れていた、あるいは意識していなかった属性を再度取り入れる操作を行うとき、または、すでに知識として持っていたある属性を書き替える操作が必要なときに用いられる。

尚、話し手だけでなく、聞き手にとって以上のような操作をする必要がある、と話し手が判断したときも用いられる。

渡辺との違いは、新たな属性の取り込みだけではなく、忘れていた、あるいは意識していなかった属性の取り込みと、すでに知識として持っている属性の書き換えのとき、という2つの操作を加えたことである。そして、話し手にとってこれらの操作のうちの一つが必要な場合だけでなく、聞き手にとって必要だ、と話し手が判断した場合も加えたことである。

具体的にこれは、次の三つの捉え直しが必要である状況に相当する。

第一に、名詞句Xのある属性を発見、または再発見する状況である。名詞句Xについて話し手が今まで知らなかった、あるいは忘れていた属性を発見して、それを知識の中に取り入れる、あるいは再度取り入れるとき、Xの記号内容を捉え直す必要があるからである。第二に、話し手の知識の中にあるXの属性と異なることが言語的文脈、あるいは非言語的文脈において起こっている状況である。その状況では、すでに知識として持っているXの記号内容の真偽を問い直したり、その結果それを書き換えたりしなければならないからである。第三に、聞き手に、Xのある属性に注目して欲しい状況である。その状況では、聞き手がその属性のことを知らない、あるいはその属性のことをその時点では忘れてしまっている（意識していない）と想定して、聞き手のためにXを捉え直してあげた方がいいからである。

### 3-2 捉え直しの状況における、「って」と「は」の違い

名詞句 X の捉え直しの状況で用いられる「って」が、「は」で言い換えができることは既に見た。捉え直しの状況における「って」と「は」の違いを次のように考える。

「って」は、話し手あるいは聞き手が知らなかった、忘れていた（意識していなかった）、あるいは間違っ覚えていたXのある属性を述べるときに用い

安斉真生

る。このうち、「は」での言い換えが不可能なのは、Xに関する知識に新たに属性を書き加える場合と、すでに持っていた属性の書き替えが必要な場合である。

「は」は、話し手がすでに知っているXのある属性を、聞き手がそれを知っているか知らないか、あるいは発話時点でそれを意識しているかしていないかに関係なく述べる時に用いる。

### 3-3 各状況の例の観察

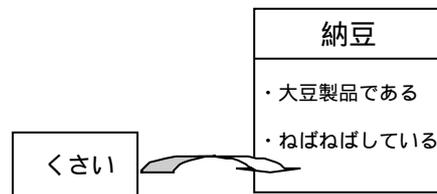
3-1で見た3つの状況の例を、「は」での言い換えの可能性、ニュアンスの違いに触れながら、順に見て行く。

#### 3-3-1 名詞句Xの属性の発見、再発見の状況

名詞句 X の今まで知らなかった属性を発見したことを述べる時、あるいはある属性を再発見したことを述べる時に、「って」を用いて名詞句Xを捉え直す形式をとる。属性の発見の状況については、すでに渡辺、丹羽で指摘されているが、再発見の状況は触れられていない。

まず、発見の状況からであるが、先ほどの(3)に、「納豆」の「くさい」という属性を発見した、という状況を付けて見てみよう。

- (9) (納豆というものを始めて食べた人が思わず発した文)  
うっ、納豆{って/??は}くさいなあ! (= (3))



図に示したように、話し手はすでに、「納豆」についての知識の中に、「大豆製品である」「ねばねばしている」という属性を持っているが、今新たな「くさい」という属性を発見し、それを取り入れている。このとき、「って」を用いて「納豆」を捉え直している。「は」での言い換えは不可能である。それは、「くさい」という属性を、話し手は知らなかったからである。

次に、ある名詞句Xのある属性を再発見した状況である。(10)では、徐々に納豆を食べたことをきっかけに「納豆」の今まで忘れていた「くさい」という属性を再発見したことを述べている。つまり、「納豆」に関する知識の中に「くさい」という属性を改めて取り入れる操作を、「って」を用いて行っている。

- (10) (納豆を徐々に食べた人が思わず発した文)

うっ、納豆{って/は}やっぱりくさいなあ! 【作例】

しかしこの場合、「って」を用いて「記号内容の捉え直し」をするという形を取らずに、「納豆」について、既に知っている「くさい」という属性を述べることも可能である。したがって、「は」での言い換えが可能である。

(11)も、属性の再発見の状況である。司会の薬丸は、若手タレントの神田うのがベテランデザイナーのコシノジュンコと友達で、「じゅんこちゃん」と呼んでいる、ということを知る。それをきっかけに、「うのちゃん」が「すごい」という属性を持つことを再発見する。再発見であることは、「つくづく」とあることから分かる。よって、「って」を用いて「うのちゃん」を捉え直している。

- (11) (神田が世界的に有名なファッションデザイナーのコシノジュンコと友達で、「じゅんこちゃん」と呼んでいることを聞いて)

薬丸：世界のコシノジュンコさんを、じゅんちゃん。すごいね、うのちゃん  
ん{って/は}つくづく。

やはりこの場合も、属性の再発見なので、名詞句「うのちゃん」を捉え直す形をとらないことも可能である。よって、「は」も可能である。

安斉真生

### 3-3-2 名詞句Xの属性と食い違いがある状況

話し手の知識の中にある名詞句Xの属性と食い違うことが現実に行っているとき、その真偽を問い直したり、その結果それを書き換えたりしなければならない。また、食い違いが相手との意見の対立である場合は、相手の知識の中の語彙項目にまだ書き込まれていないその属性を提示しなければならない。このような状況で「って」が要求される。

(12)の例では、司会の薬丸は、ゲストの神田についての知識の中に「若い」という属性を持っている。また、ワインについての知識の中に「たくさん所有している人はある程度年齢のいった人だ」という属性を持っている。しかし、神田は「私1975年生まれだから75年の結構いいワインがあるんですよ。」と言う。それは、薬丸の持っている「神田」についての知識と食い違うことである。そこで「うのちゃん (=神田)」の記号内容を捉え直し、「年齢」という属性を尋ねている。

(12) (神田が自宅のワインの貯蔵棚の写真を見せながら)

神田：私1975年生まれだから75年の結構いいワインがあるんですよ。

薬丸：うのちゃん{って/??は}今、いくつだっけ。

神田：私、23。

この状況では、「うのちゃん」の属性の知識「若い」を書き換えなければいけないかもしれないから、「うのちゃん」を捉え直さなければならない。つまり、もともと年齢についての情報がない状態で問うのではなく、今まで持っていた「うのちゃん」の年齢という属性の情報を消去し、新たなその属性の情報を求めているので、「は」はかなり許容されにくい。

次は、話し手と聞き手の間でXについて意見が食い違っている場合である。真紀子の「恋を始めるならホテルへ行こう」という誘いに対し、天は「恋を始めることはホテルへ行くことではない」と主張する。恋を始めることについて2人の意見は食い違っている。つまり、「恋」についてお互いが異なる属性を持っている状況だ、と言える。このような状況では、話し手の反応として、自分が知識として持つ属性の真偽を問うか、聞き手がその知識を持っていない(あるいは間違った知識を持っている)から教えてあげる(あるいは正してあげる)か、のどちらかが考えられる。話し手の真紀子の反応は後者である。「恋」の「体を重ねることだ」

という属性を、天に教えてあげている。これは、聞き手がその属性を知識の中に取り入れる必要がある、と話し手が判断している状況だと見なすことができる。それで、「って」が用いられているのである。

- (13) (真紀子と天は出会ったばかりである。真紀子が積極的に天にアプローチする。)

真紀子：(恋を)始めてみる？。

天：……そうだね。

真紀子：じゃ、行きましょう。

天：どこへ。

真紀子：ホテル。

天：……。恋を始めるんじゃないの？

真紀子：恋{って/は}体を重ねることでしょ？

天：……。

【W】

(13)では「は」での言い換えが可能であるが、「って」とはかなりニュアンスが異なる。「は」を用いる場合、天がどう考えているかは知らないが、「恋」について真紀子がすでに知っている属性を天に述べている状況、という解釈になる。特にこの文では文末が「～でしょ」で終わっているため、天の意見を無視して、真紀子が自分の意見を天に押し付けているような高圧的な物言いに聞こえてしまう。一方、「って」を用いて「恋」の記号内容を捉え直す形式をとる場合、天が「恋」について自分と違う属性を持っていることを認めた上で、真紀子の思う属性が正しいと賛同しそれを知識に取り入れてもらおう、としていることになる。つまり、同じ反論でも、「って」を用いると相手が違う意見を持っていることを認めた上で反論していることになり、自分の意見を一方的に主張するだけの「は」よりも反論のニュアンスを和らげることができるのである。

(14)も同様の例である。男性司会者はゲストの和泉と違う意見を持っている。そこで「って」を用いて、聞き手と和泉が知識として持っていない「ディスコ」の「家族で行くものではない」という属性を提示する形で反論している。

- (14) (23歳で狂言の和泉流の家元である和泉元弥へ視聴者から寄せられた「ジープンをはいたことはありますか。ディスコに行ったことはありま

安斉真生

すか」という質問に対して)

和泉 : えっと、(ジーンをはいていたのは)高校から大学にかけて、ですね。ディスコには家族で1回だけ。向学のために。

女性司会者: 家族で。

男性司会者: ディスコ{って/は}家族で行くもんと違いますよ。

和泉 : 30分だけ。30分だけ見学に行ったんですよ。

「は」とのニュアンスの違いは、(13)で見た違いと同様である。

### 3-3-3 名詞句Xの属性に聞き手に注目して欲しい状況

名詞句Xのある属性に注目した上で、Xに関して何かを述べようとすることがある。そのとき、聞き手もその属性に注目していなくてはならない。その直前にXについて話していたとしても、他の属性に注目して話していたのであれば、その属性に聞き手の注意がいていないこともありうる。聞き手がその属性に注目していないことが前もって想定されるとき、事前にそれを提示する必要がある。また、Xに関して何かを述べた後、聞き手がその属性に注目して聞いていなかったことが後で分かったとき、それを後から補足して聞き手に提示することもある。そのような際、「って」を用いると、聞き手がその属性のことを意識していなくても、あるいは忘れていても、聞き手にそれを再度取り入れることを要求できる。また、たとえ聞き手がその属性を知らなくても、その時点で知識に取り入れることを要求できる。

まず、Xの属性をあらかじめ聞き手に提示する状況について、例を見ていく。

(15)では、「広東語」の「何でも最後に『マァ』がつく」という属性を提示している。話し手の関根は、この属性に注目した上で、クイズの答えを述べようとしている。広東語のこの属性を聞き手の小林が知らないかもしれない、あるいはそれに注目が向けられていないかもしれない、と想定している。そこで、「って」を用いて、聞き手に対してこの属性を知識の中に取り入れることを要求する形をとっている。

- (15) (日本語に入っている中国語の単語が、北京語、広東語ではそれぞれどのように発音されるか、というクイズ。「北京」という単語の北京語の

発音の問題を終えた後で、次に広東語の発音を考える問題で。)

小林：広東語は？ペイジン、ペキン、ペイジン、ペッキョウ、ペッキョウ、ペッキオン。

関根：広東語{って/は}ね、最後に「マア」がつくんだよね、何でもね。だから「ペッケイマア」。

ところでこの状況では、「は」で言い換えが可能であり、「って」とのニュアンスの違いはほとんどない。先ほど見た(13)、(14)の例では、問題になっている属性を聞き手が持っていないことが明らかであった。しかし、(15)では、小林がこの属性を知識として持っているかもしれないし、あるいは現時点で意識しているかもしれない。よって、「は」を用いて聞き手に関係なく、自分がすでに知っていることとして述べるのが可能なのである。しかし、やはり「って」を用いると、「広東語」の記号内容を捉え直すことができるため、これまでの話で注目されてきた「広東語」をもう一度捉え直し、別の属性に注目することを聞き手に促すことができる。

(16)では、「中学、高校時代の部活動」が話題になっているところで、いきなり「狂言」の「体を非常に駆使する」という属性を提示している。この一文だけが話とは全く関係が無いように見える。しかし、やはり、聞き手に対して、この属性に注目することを求めている。聞き手にこの属性に注目させた上で、「体操に入ったっていうのはやっぱりそういうのもあるんですか？」という質問を発しようとしている。つまり、この質問を発するために、あらかじめ注目すべき「狂言」の属性を提示していると言える。しかし、属性の提示の文の文頭に「だって」という接続詞が用いられていることからわかるように、この文は前の質問とも関連がある。なぜ前の質問を発したかを、この文で説明しようとしているのである。結局、「狂言」の「体を非常に駆使する」という属性によって、「中学、高校時代の部活動」という現在進行中の話をより大きな「狂言」という話と結び付けている、とすることができる。

- (16) (狂言の和泉流の家元を迎えてのトーク番組。和泉(家元)の少年時代についていろいろと話を聞いている。)

男性司会者：あの、中学校の時とか高校の時は、クラブ活動とか部活は

安斉真生

入ってたんですか？

和泉：あ、やってました。中学の時は体操部で、高校の時は陸上部。

男性司会者：器械体操ですか？

和泉：はい、器械体操です。

男性司会者：あ、そう。だって、狂言{って/??は}体をすごい駆使するじゃないですか、いろいろと。

和泉：わりとそうですね。

男性司会者：体操に入ったってというのはやっぱりそういうのもあるんですか？

和泉：あの、狂言のためになって考えたわけじゃないですけども、自然と、体操やって、あ、生きたな、ってことはあります。

ところで、(16)は「は」での言い換えは可能なはずであるが、会話参加者の関係を考えると不自然である。「は」を用いると、男性司会者が、聞き手の和泉が知っているか知らないか、意識しているかしていないかに関係なく、自分が知っている「狂言」のある属性を述べていることになる。家元の和泉の方が、狂言の属性についてよく知っているはずなのに、それを無視して自分の知っている狂言の属性を述べるというのは、差し出がましい印象を与えてしまう。

(17)では、女性司会者が視聴者からの手紙を読み上げたが、その状況が聞き手に理解されていないかもしれない、と男性司会者は判断した。そこでそれを理解するために必要な「ビデオ」の「50年代の後半はまだあまり普及していなかった」という属性を後で補足している。

(17) 「懐かしのビデオコーナー」に寄せられた、「おしんの初孫の役で自分の初孫が出た時にビデオに録画するのを、当時自分のうちにはビデオがなかったから電気屋に頼んだのだが、それが撮れていなくて、結局撮り逃してしまった、という手紙を読んで」

男性司会者：これだって、50年代の後半ですからビデオ{って/は}あまり普及していなかった時代ですから、電気屋さんに頼んだんだけども、

女性司会者：それも、電気屋さんも失敗しちゃった、結局ビデオには何も写っていなかったってことなんですか。

この状況においては、前に見た(15)と同様、「は」での言い換えが可能であり、「って」とのニュアンスの違いはほとんどない。しかしやはり、「って」を用いることによって、聞き手(=この場合は視聴者)がこの属性を知らない場合、あるいは意識していない場合を想定して、これに注目させることができる。

#### 4. 「って」と丁寧さの関わりについて

3-3-3で、以下の例を見た。話し手の男性司会者は、聞き手の和泉が「狂言」のこの属性に注目していない、と想定して「って」を用いている。

(18) 男性司会者：だって、狂言{って/??は}体をすごい駆使するじゃないですか、いろいろと。

和泉：わりとそうですね。

男性司会者：体操に入ったってというのはやっぱりそういうのもあるんですか？(=(16))

したがって、和泉がこの属性に注目しているかどうかを無視して発話しようと思ったら、「は」が用いられるはずである。しかし、「は」を用いると、自分(=男性司会者)より家元の和泉の方が「狂言」についてたくさんの知識を持っている、という事実を無視しているようで、差し出がましい印象を与えてしまい、丁寧さを欠き不自然である。

そこで、「って」の丁寧さとの関わりについて述べる。

##### 4-1 話し手の認知状態を表す「って」と話し手による聞き手の認知状態への配慮を表す「って」

3で、「って」が、Xの属性知識の取り入れに関わる3つの操作がなされるときに用いられることを見たが、その操作は、話し手のものだけでなく、聞き手にとってそれが必要だ、と話し手が判断する場合も含まれた。言い換えれば、「って」は、話し手のXのある属性についての認知状態を表し、また、話し手による、聞き手

安斉真生

の認知状態への配慮を表す機能を持っていると言える。Xのある属性についての認知状態とはつまり、Xのある属性を、知っているかどうか、意識しているかどうか、という状態のことである。

#### 4-2 丁寧さ

ここでもう一度(18)の例に戻るが、「って」が用いられているのは、先述の通り、話し手が、聞き手がその属性を意識していない、と判断しているからだ、と考えられる。しかし、それならば「は」が許容されるはずなのに、実際には不自然であるのは、その他の理由がこれ以上に大きく働いていることを示している。その理由とは、聞き手の方が「狂言」についてずっと多くの知識を持っている、と話し手が判断していることである。そして、それを表わすために、「って」を用いて「狂言」が自分(=話し手)にとってよく分からない語のように言っているのである。

似た例として、(19)を見てみる。ここでは、話し手Cは、Aの「チドリの趣味の悪い指輪はゴンドラからプレゼントされたものだろう」という意見を聞いたのをきっかけに、「ゴンドラさん」が「気持ち悪い」という属性を持つことを再発見している、と解釈できる。

(19) (性格の悪い、職場の嫌われ者のチドリが、彼氏の、これまた嫌われ者のゴンドラからプレゼントされたと思われる、趣味の悪いヘビがダイヤをくわえている指輪をしているのを見て女子社員が、口々に言いたいことを言う。)

A: あの指輪だってゴンドラからもらったんでしょ。あんなのをプレゼントする奴なんて、ゴンドラくらいしかいないわよ。

B: わたし、あんな指輪死んでも欲しくないわ。

C: ゴンドラさん{って/?は}気持ち悪いもんね。 【無243】

再発見の状況なら、自分がその属性を忘れていたことを表さずに言うことも可能だから、「は」でもおかしくないはずである。しかし「は」だと、差し出がましいニュアンスがある。ということは、この「って」が用いられるのには他の理由があるはずである。そこで、このCとAの二つの発言の関係を見ると、Cの発言は、

Aの発言の根拠になっている。つまり、Aの発言の根拠を言うことによって、CはAへの賛同を示している、と言える。この「ゴングさん」の属性は、Aの発言の根拠なのだから、Aの方がCより早くから意識している、と言える。「は」を用いることは、この属性に対する認知状態の差を無視することであり、それが差し出がましい印象に繋がると言えよう。

つまり、話し手は、会話開始以前から持っていた聞き手についての情報、そして会話中に得た聞き手についての情報をふまえた上で、適切に会話に参加することが求められる。捉え直しの「って」を用いることによって、話し手と聞き手の間の、ある名詞句Xの属性の知識の差、意識の度合いの差に配慮した、丁寧な発話を行うことができる。話し手がすでに得た、聞き手の名詞句Xのある属性の認知状態についての情報を無視すると、丁寧さを欠く発話になる。また、聞き手のその属性の認知状態について情報が未確認の場合は、「って」を用いて、聞き手はその属性を知らない、あるいは意識していない、と想定した方が、丁寧な発話になる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、まず、捉え直す用法の「って」が現われる3つの状況について述べた。そして、「は」での言い換えの可能性、言い換えたときのニュアンスの違いから、捉え直しの「って」が談話においてどのような機能を果たすかを明らかにした。また、「って」が、丁寧さと関わることも見た。

次に今後の課題であるが、藤村、丹羽、渡辺で、「って」の前に直示的な名詞句がくる、次のような例の存在が指摘されている。

- (20) 小林：ライチ茶、これ早速飲んでみましょうか。  
関根：落ち着くね、こういうのってね。
- (21) (AとBはフランス料理屋でコース料理を食べている。フィンガーボールの水を飲もうとしているBに対して、Aが)  
それって飲むもんじゃないんじゃない？ 【作例】

藤村は、記号論的立場から、このような例について、直示的な名詞句は記号と

安斉真生

モノが1対1の対応をなさないため、属性を述べる文として解釈することは本来は不可能だ、としながらも、最近認められるようになってきている理由を明らかにしている。筆者は、その理由を、そのような例が談話で果たす機能を探ることによって明らかにしたい。

また、本稿では「って」を取り上げたが、「って」は「というのは」の省略形である。そして文体的な異形態として「とは」が存在する。「って」がその中では最も使用制限が弱いとされている<sup>4</sup>が、「とは」「というのは」「って」の機能の異同を明らかにする予定である。また、これ以外のメタ言語、メタ言語行動<sup>5</sup>についても扱い、それらがどのように会話の進行、調整に携わっているかを明らかにしたい。

付記：本稿は、平成10年度修士学位論文の一部に加筆修正したものである。

## 参考文献

- 安斉真生(1999)「っての機能について」名古屋大学大学院文学研究科修士論文
- 杉戸清樹(1996)「メタ言語行動の視野 - 言語行動の『構え』を探る視点 - 」『日本語学』15巻11号
- 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆史(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp.211-233
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代(1998)「教科書の落とし穴 第3回『～は何ですか』」『月刊日本語』6月号 アルク pp.68-71
- 丹羽哲也(1994)「主題提示の『って』と引用」『人文研究 大阪市立大学文学部 紀要』46巻2分冊 pp.79-109
- 藤村逸子(1993)「わからないコトバ、わからないモノ - 『って』の用法をめぐって - 」『言語文化論集』14巻2号 名古屋大学言語文化部 pp.45-

<sup>4</sup> 藤村(1993)は、「とは」「というのは」「って」の順で使用制限が弱くなると述べている。

<sup>5</sup> 杉戸(1996)によると、メタ言語行動とは、言語形式そのものについての言及を含む、言語行動の色々な側面について語る言語のことである。

- 堀内克明・大森良子(1994)「若い女性のことばの語形・語義の特色」『日本語学』  
13巻11号 pp.72-80
- 堀口和吉(1995)『「～は～」のはなし』ひつじ書房
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- 渡辺誠治(1995)「ある要素に対する新規の属性の取り入れに関わる形式『ッ  
テ』と『』を中心に」『さわらび』第4号 神戸市外国語大学  
pp.105-122
- Lambrecht, K. (1994) *Information structure and sentence form –Topic, focus and the mental  
representation of discourse referent*. Cambridge University Press.
- Ohso Mieko (1984) *CONTRACTIONS : tte&chau*. Unpublished paper.

### 例文出典

- 【無】群ようこ『無印OL物語』(1989)角川文庫
- 【最】林真理子『最終便に間に合えば』(1988)文春文庫
- 【W】テレビドラマ「WITH LOVE」のシナリオ
- 出典の表記されていないものは、テレビのトーク番組(NHK『スタジオパーク』)、もしくは番組(TBS『はなまるマーケット』、『超アジア流』)内の会話の部分を録音し、文字化したものである。尚、事例には存在しなかったが、使われる可能性のあるものは、作例を用いた。(【作例】と表記)

